

令和3年度 臨床研究テーマ成果報告書

診療科（部）名：咀嚼補綴科

第3期中期目標・中期計画期間中の臨床研究テーマについて該当するものにチェックを入れてください。（塗りつぶし可）

- 1. 口腔領域における新規組織再生・再建法の開発
- 2. 高齢者の特性に配慮した口腔疾患の予防法・診断法・治療法の開発
- 3. 顎口腔機能の維持増進に関する研究
- 4. 歯科医学臨床教育の質保証に関する研究
- 5. その他

研究期間：2020年7月8日～2025年3月31日

研究課題名：歯科疾患・口腔機能と健康長寿との関係

研究課題の概要及び成果：長寿は、遺伝的要因、生活環境、社会経済的要因、精神的・身体的健康習慣、疾患の治療歴などが複雑に絡み合って達成できると考えられる。口腔機能は、認知・運動機能、全身疾患に関わっていることが報告されており、口腔機能の維持は、長寿への大きな要因の一つであると考えられる。本研究では、歯科疾患や口腔機能が、認知・運動機能、全身疾患、血中老化物質、老化にどのように影響するかについて、縦断研究によって明らかにすることを目的としている。

本年度は、2013年度と2019年度にSONIC研究に参加した高齢者488名（72-74歳（2013年度時）、男性：246名、女性：242名）を対象に、縦断データを用いて、臼歯部咬合支持の喪失と咀嚼機能の変化との関連を検討した。6年間での咬合支持状態の変化は、EichnerA→A群が217名、B1-3→B1-3群が101名、B4-C→B4-C群が102名、A→B1-3群が41名、A・B1-3→B4-C群が24名、B1-3→A群が3名であった。咀嚼能力を目的変数とした線形混合モデルの結果、性別、咬合力、欠損放置歯数、経過年数、咬合支持状態の変化は、咀嚼能力に有意な関連を示した（表）。さらに、咬合支持状態の変化と経過年数との交互作用項は、咀嚼機能低下に有意な説明変数となった（図）。

上記概要・成果に関連する図表等

表 咀嚼機能と咬合支持状態の変化との関連の検討（線形混合モデル）

変数	標準化係数	標準誤差	p値
性別	-0.47	0.13	<0.001
義歯の使用	-0.22	0.20	0.264
年齢	0.01	0.07	0.852
咬合力 (N)	0.002	0.0003	<0.001
欠損放置歯数	-0.16	-0.04	<0.001
経過年数 (年)	-0.37	0.14	0.007
咬合支持状態の変化 (参照カテゴリ：A→A群)			
B1-3→B1-3群	-0.64	0.26	0.013
B4-C→B4-C群	-2.42	0.29	<0.001
A→B1-3群	-0.35	0.30	0.242
A・B1-3→B4-C群	-1.43	0.41	<0.001
咬合支持状態の変化と経過年数の交互作用項 (参照カテゴリ：A→A群×経過年数)			
B1-3→B1-3群×経過年数	-0.39	0.24	0.101
B4-C→B4-C群×経過年数	-0.53	0.24	0.028
A→B1-3群×経過年数	-0.07	0.36	0.848
A・B1-3→B4-C群×経過年数	-1.49	0.43	<0.001

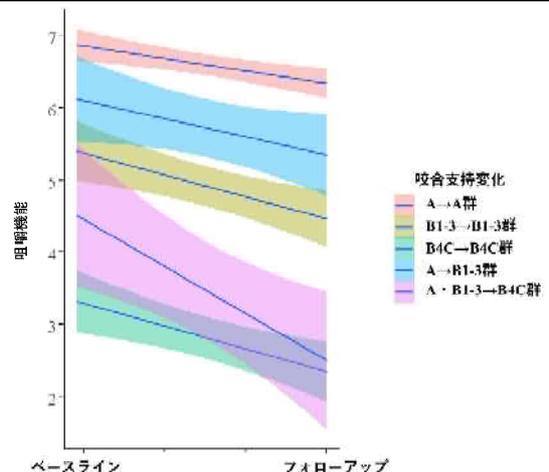


図 咬合支持変化と咀嚼機能との関連

当該臨床研究が「口の難病プロジェクト」に関連しているか否か下記のBOXのいずれかにチェックを付してください。(塗りつぶし可)

- 関連がある
- 関連はない